
今さら初代.....と見せかけてほぼオリ

魔神 1 3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今さら初代……と見せかけてほぼオリ

【Nコード】

N5254BA

【作者名】

魔神13

【あらすじ】

初代の赤、緑などをベースにしたほぼオリジナルのポケモン小説です。若干ストーリーが現実的でシビアだったりします。ほのぼのした空気をお求めの方はまわれ右の方が良いかな？

オリジナルの主人公で、主人公を含め転生者が複数出てきます。主人公最強物ではありません。

転生者の中には自称最強オリ主という痛い存在がいます。

アニメ版の主人公のサトシ等は存在しますが人づてに話を聞いたりはしても深くかわつたりはしません。

旅立つ前に（前書き）

恋姫が完全に詰まったので、ちょっと息抜き。
テンションが続く限り書きます。

プロットはお月見山くらいまで出来てます。

旅立つ前に

「人類とポケモンの歴史を紐解けば、それが共存と闘争の歴史だったことは今さら君達に教えるまでもないだろう。ポケモン達は時に我々人類の良き隣人であり、またある時には最大の仇敵であった。いや、今から二百年前にモンスターボールが開発され、広く世間に普及するまでは常に仇敵であったと言っても良い」

担任である五十を半ばまで過ぎた初老の男性教師の声が、マサラタウン第二中等学校三年一組の古びた教室に響く。

しかし、その声を拾うべき男女合わせて三十人前後の生徒達の大半は、春の訪れを感じさせる暖かな午後の日差しに睡魔を刺激され舟を漕いでしまっていた。

勿論、そんな生徒ばかりではなく数人の生徒は真面目に背筋を伸ばし、担任の言葉に耳を傾けている。

高坂ヒロキは数少ない背筋を伸ばす生徒の一人だった。

マサラタウンでは良く見かける黒目黒髪という容姿をしているヒロキの特徴を挙げるとするなら、既に百八十センチを超える長身とやや釣り目がちな目つき、後は年齢に不相応な落ち着いた雰囲気、身に纏っている……という事だろう。

「君達が将来どのような職業に就くのか、先生はほとんど知らない。だが、どの職業に就こうがこの共存と闘争という歴史からは逃れられない事を理解していて欲しい。農業を営む方達はディグダやダグトリオに田畑を耕させる一方で作物を荒らすキャタピーやポツポ、オニスズメを追い払わねばならない。漁業を営む方達はギャラドスといった脅威から舟を守るべく一隻の舟に十数匹もの水棲ポケモンを護衛につける。運送業を営みタウン間を往来するトラックの運転

手ともなれば食糧目当てに襲ってくる大型ポケモンの体当たりや電撃、炎、念力等から荷を守りぬかねばならない」

担任教師の言うようにポケモンは人類に大いなる力を貸す半面、それに倍すると言ってよいほどの脅威も与えてくる。それがこの世界に住まう人類の常識であった。

「タウン内だって安全とは言い切れない。ポケモンを犯罪に使うロケット団の様な組織の存在もあるが、それ以上にやはり食料などを求めてタウンを襲ってくる野生ポケモンの群れの脅威は絶対に無視できない」

だから、明日君達は……と言いかけた所で、担任は口籠った。如何にも不本意といった表情が彼の顔に張り付いている。

ヒロキは彼の内心を察する事が出来たので黙っていたのだが、あえて口を開く者もいた。

ヒロキの親友であり、二つ後ろに座る沢渡ケンだ。彼はヒロキに次ぐクラスで二番目の長身だがどちらかと言えば子供っぽい顔つきをしており、今もその顔に陽気な笑顔を張りつけている。

「皆まで仰らずとも分かってますってば、先生。俺達はそんな物騒な世の中でもしっかりと自立できるように最低限の力をつけなきゃ……つまり、ポケモントレーナーにならなきゃいけない。だから、明日の卒業式でオーキド博士からそれぞれ一匹ずつポケモンを貰いその日の内に旅立つ。期間は通常一年。一年以内にジムバッチを三個取れなきゃ期間は延長。本人の希望があれば三個以上取っていても旅は続けられるがタウンからの資金援助等は打ち切り。こんなの小学校の頃から耳にタコが出来るほど聞かされてきたってば」

「沢渡……お前はそう気楽に言うが、その旅の途中で命を落とす新米ポケモントレーナーだって少なくないんだぞ。ここ十年の統計で

は約四％だ。事故や犯罪に巻き込まれるケースなんか三十五％だ」
「でも、旅立ちには法律で定められた義務なんですよ？　だったらグダグダ言っても始まりませんよ」

中学を卒業したらポケモントレーナーとして旅立つ。これはある意味兵役の様なものだ。病気などの例外を除けば、男女関係なく課せられる義務。

だからこそヒロキやケンは旅立ちを当然の物と受け止めているが、教職に就く者としては教え子達が危険な目にあうのは理不尽に思えて仕方がないのだろう。

教室に微妙な空気が漂い始める。

担任とケンの口論にも似た言い合いを耳にして、何人かが不安を覚えたのだ。

そんな空気を払拭すべく、ヒロキは助け船を一隻出した。

「……先生。出来れば、旅立ちに関して何かアドバイスをいただけませんか。人生の先達として」

「あ、ああ、そうだな。……先生に出来るのはもうそのぐらいか」

ゴホンと大仰に咳払いをする担任。

夢の中に旅立ちかけていた大半の生徒がこれで目を覚まし、何やら真剣な面持ちをする担任の姿に戸惑いながらも背筋を伸ばした。

「本来ならクラスの友達と協力し合って云々と語りたいが、自立心を高める為に同じタウン出身者は一緒に旅をしてはならないという習わしがある。だから、だからこそ、相棒を大事にしろ。明日、オーキド博士から頂く最初の手持ちポケモンを。どんなポケモンが君達に与えられるのか先生は知らされていないが、ポケモン研究の第一人者として名高いオーキド博士が一人一人君達に合うと判断されたポケモン達だ。きっと君達の助けになってくれる。弱いポケモ

ン。可愛く無いポケモン。育てるのが面倒なポケモン。色々不満を持つ事もあるかもしれないが、絶対に彼らを虐げたりはしないで欲しい。一年後、このマサラタウンに戻って来て僕達はこれだけ絆を深めましたと、先生に自慢して欲しい。先生からは以上だ」

ヒロキ達生徒一同は担任の真摯な眼差しに応えるよう、力強く頷いた。

閑話 オーキド博士の悩み

マサラタウンの第一、第二、第三中等学校の合同卒業式を明日に控えた深夜。

オーキド博士は自らが所有する研究所の一室で頭を抱えて唸っていた。

目の前のデスクには数十枚の書類が散らばっており、その書類とは顔写真付きの履歴書の様なものであった。

「むづう……困ったのう」

実は、この履歴書の主達に明日渡すべきポケモンが未だに決まっていないのだった。

例年ならばこんな事は無かった。

頭脳派の生徒には特殊攻撃主体のポケモン。体育会系の生徒には物理系攻撃主体のポケモン。虫好きや魚好きには虫タイプ、水タイプとサクサク決めて、卒業式一週間前には準備万端整っているのが普通だ。

ならばなぜ今年に限ってこのような事になっているのかというと、理由は二つある。

まず一つ目はこの学年の子供達が生まれた年はベビーブームが再来したのか、マサラタウン全体で例年より二クラス分も多く赤ん坊が生まれたのだ。

いや、その一つ目の理由だけなら仕事量が少し増えるだけなのだからさしたる手間はかからない。

本当の問題は二つ目の理由だった。

「何ともまあ、個性豊かというか……とんがった性格の持ち主ばかり

りじゃのう」

無闇やたらと我が強く、周囲を見下す者。ポケモンマスターになるなんて簡単だと大言壮語を吐く者。中には友人同士の会話の中だけではあるが伝説のポケモンの居場所を知っていると法螺を吹く者までいる。

「そういう子達に限って何故かワシの孫のシゲルや、シゲルの幼馴染のサトシ君に異常なまでの対抗心を持っておるし……そうでない子の何人かは露骨にワシにすり寄ってくる。はあっ……厄介じゃのう」

この手のタイプの生徒に特別強いポケモン。例えばヒトカゲ、ゼニガメ、フシギダネといったポケモンを与えると碌な事にならないのをオーキド博士は経験則から知っていた。

だからと言って普通のポケモンを与えると、それを不満に思いポケモンへの虐待を始めるのだ。虐待といっても何も力任せに殴る蹴るをやるわけではない。わざと相性の悪いポケモンと戦わせたり、食事の質を落したりといった陰湿で傍目には分かり辛い事をするのだ。

困った困ったと呟きながら履歴書に再び目を通し始めたオーキド博士だったが、一枚の履歴書でその手が止まった。

「ふむ……高坂ヒロキ君か。学校の成績は常に上位で性格も真面目な上に温厚……人としては合格点なのじゃが……バランスが取れ過ぎていて、逆にどのポケモンを与えたら良いのかさっぱり分からん」

優秀なポケモントレーナーは何か光る物を持っている。

それは特別な才能ではなく、どちらかと言えば個性に分類されるものだ。そういった意味では高坂ヒロキより、先ほどあげた困った

性格の連中の方がトレーナーとしての資質は上かもしれない。

「ポケモンも同じようにバランスのとれたタイプにするか……それともあえて対極の一点特化型にするか……」

オーキド博士が黙考していたのはおよそ五分ほどの時間だった。

「よし。この子にあげるポケモンは」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5254ba/>

今さら初代……と見せかけてほぼオリ

2012年1月14日17時11分発行